



あなたのワンちゃん、最近こんな様子は見られませんか？



もしかしたら膿皮症のうひしょうかもしれません。

どんな  
病気？

皮膚に常在するブドウ球菌が、過剰に増えて起こる病気  
膿皮症をきっかけに、基礎疾患が見つかることも多いため、膿皮症の治療は皮膚症状を改善するとともに、基礎疾患の治療もあわせて行うことが大切です。

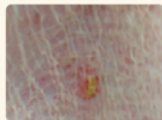
おもな  
症状

赤や黄色の発疹が円形状広がり、  
症状が出る部位にも特徴があります。

☑赤いブツブツ  
ができる



☑膿疱(黄色い  
ブツブツ)ができる



☑フケが  
増える



☑脱毛する  
(毛が束で抜ける)



原因

成犬やシニア犬の場合は、アレルギー性皮膚炎や食物アレルギーなどの基礎疾患が、膿皮症の要因になっていることが多いと言われています。ただし子犬は、免疫機能などが未熟なため、膿皮症だけが起こることもあります。

膿皮症を引き起こすおもな基礎疾患

ホルモン  
関連の病気

アトピー性  
皮膚炎

疥癬症  
などの感染症

食物  
アレルギー

検査  
治療

発疹の視診、顕微鏡での皮膚検査から膿皮症を診断します。さらに、基礎疾患が疑われるときは、アレルギー検査やホルモン検査などもあわせて行い、病気がわかれば、膿皮症と平行して治療します。膿皮症の治療は、抗生物質を塗ったり、服用したりする治療に頼らず、抗菌シャンプーや消毒液で菌の数を減らしていく治療が主流になっています。



膿皮症でかゆみは出ない!?

膿皮症単体ではかゆみが出ないことが多いですが、アトピー性皮膚炎や寄生虫による感染症が要因となって膿皮症が起こった場合かゆみが出ます。

犬の現代病は、「いぬのきもち」で毎月連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が  
マイページから定期購読を申込みと  
**2号** (2ヶ月分) **無料!!**